

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 3 月 1 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	石塚真太郎

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
コンゴ民主共和国ルオー学術保護区ワンバ村
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生ボノボの予備調査
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 11 月 29 日 ~ 平成 28 年 3 月 1 日 (94 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
霊長類研究所 古市剛史教授、坂巻哲也
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回のコンゴ民主共和国ワンバ村への渡航は、野生ボノボの非侵襲的 DNA サンプルングを目的とし、ワンバ村にて以下の日程で行われた。 2015/11/29 関西国際空港発 2015/11/30 イスタンブールを經由し、キンシャサ着 2015/12/2 ジョル着 2015/12/3 ワンバ着 2016/2/24 ワンバ発ジョル着 2016/2/25 キンシャサ着 2016/3/1 イスタンブールを經由し、関西国際空港着 今回のワンバ渡航は、私にとって2回目の渡航であった。前回森歩き、食事、言語等、多々適応が難しい面があったので、事前に現地語(リンガラ語)をかなり勉強し、調査用具、日本食等の装備もかなり充実させて渡航した。 調査では、糞サンプル189、尿サンプル60、食痕サンプル52サンプルを採取した。合計で291サンプルを採取できたのは、何よりもまず、私が森歩きに慣れたことが大きいと思う。前は森の中でほとんどボノボ、トラッカーについていくことができなかったが、調査用具を改良してこともあり、今回はおおむねついていくことができた。また、ボノボを観察する中で、地上生草本(THV)の食痕にボノボの唾液が付着しているのではないかと考え、サンプルングした。唾液からDNAが取れているかは今後の実験によって分かるが、取れていればよいと思う。 今回のDNAサンプルングは、3集団の全個体を複数(2-3)サンプル集めることを目的としていた。一方で1、2月に入ると、ボノボのパーティが分散し、ターゲットの個体を観察することすらできない日が続いて苦労した。サンプルングは、集団の凝集性がよい時期の方が行いやすいようだ。また、やはりアカンボウはサンプルングが大変であった。とりわけ1歳未満であると、樹上で排泄する尿が少量で、地上まで降ってこないことも多々あった。それらの問題は、ある程度割り切るしかないと思う。 また、病気のアカンボウが死亡する事例を観察することができた。子供が死んでから一日後、母親が死体の下に戻り、グルーミング、虫を払うなどの利他行動を見せた。アカンボウが病気で苦しうに死んでいくのは少し見るのが辛かったが、貴重な観察になったと思う。一方で、観察を客観的に第三者に伝えるとなったとき、どのように記録するかは改めて大切だと感じた。 3か月間のアフリカでのフィールドワークは、毎日がとても刺激的だった。ワンバの人たちの膨大な要求や交渉の仕方は、明らかにこれまで私が接してきた人々とは違った。私たちと彼らの間では何が違うのだろうと感じた。おそらく「文化」、「歴史」などと一言で片付くようなものではないけれど、決定的な何かがある気がした。私たちと彼らの間での良し悪しはない一方で、実際に彼らの対応に困ってしまう私は、彼らに腹が立つことも多々あった。一方で彼らの協力なしには、調査はできない。自分なりに彼らのやり方を理解し、消化し、適切な距離を保ちながら接することが大切だと思った。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

アフリカでは、自分の無力さを感じる事が多々あった。渡航、調査、生活、何をとっても自分ひとりではできない。しかしよく考えてみると、日本でもそうだ。今大学院生の自分は、多くの人の協力の下で成り立っているのだろう。これからは、今自分のしたい研究ができて環境に感謝し、研究に打ち込みたい。



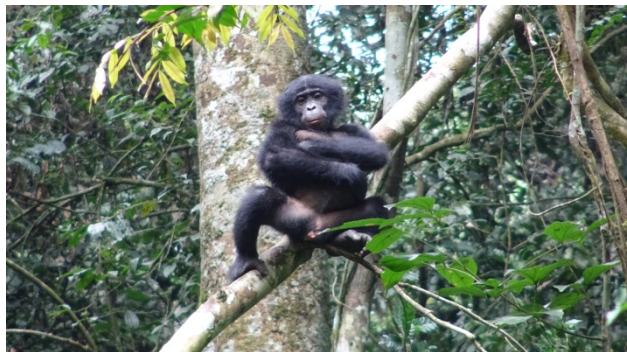
ボノボ 1



ボノボ 2



ボノボ 3



ボノボ 4



ボノボ 5



ボノボ 6



トラッカー



村の子供たち

6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS リーディング大学院プログラムの支援を受けて遂行できました。PWS プログラム、ご指導を賜った古市教授、渡航に同行して下さった坂巻氏および渡航先で様々な支援をして下さった皆さまに感謝申し上げます。